

多田源氏と丹波国の妖怪伝承

——サムライの精神的レトリックの誕生——

佐々木高弘

鎌倉初期成立の『古事談』巻第四——一九に次のような説話が見える。

白河院御寝の後、物におそはれ御坐しける比、「然るべき武具を御枕上に置くべし」と沙汰有りて、義家朝臣に召されければ、まゆみの黒塗なるを一張進りたりけるを、御枕上に立てられける後、おそはれさせ御坐さざりければ、御感有りて、「此の弓は十二年合戦の時や持ちたりし」と御尋ね有る処、覚悟せざる由申しければ、上皇頻りに御感有りけり。⁽¹⁾

白河院が物の怪の出現に際し、義家の十二年合戦の時に使用した弓を枕元に置き、難を逃れたとする説話である。義家とはあの八幡太郎こと源義家で、十二年合戦とは前九年の役のことである。この役を契機に源氏が東国に勢力を伸ばし、後に頼朝に引き継がれサムライの世が立ち現れる。その彼らが持った武具は単に物理的

な道具、というだけではなかった。精神的な拠り所としての側面もあったのである。

近年の国内外で使われるサムライというレトリックには、このような精神的な側面が多くあるように思えてならない。なぜなら現在、サムライは物理的にどこにも存在していないからである。つまり現代のサムライというレトリックは、サムライではない者たちが、サムライの精神を帯びて、何かに立ち向かうということなのだろう。例えば野球選手やサッカー選手、あるいはサラリーマンたちが異国で活躍するような場合に。それはこの『古事談』の場合も同じなのだ。

それはさておき、この説話でいうサムライの物理的側面とは、実際に身体や武器などを使用して敵と戦うことであろう。ここでは、義家の前九年の役での、卓越した働きを意味している。ではサムライの精神的側面とは、何を意味しているのだろうか。もちろん後世の私たちなら、まず武士道をあげるだろう。しかしその多くは、江戸時代に成立している。つまりこの説話から、ずいぶん後の時代のものなのだ。この説話で言うところの精神的側面とは、具体的に何を指しているのだろうか。それは白河院が就寝に際して襲われた物、つまり物の怪であり、それに対抗することなのだ。確かに対抗する対象である物の怪は、物理的存在ではないし、しかもそれに対抗するのだから精神力なのだろう。当時の人たちは、今の私たちよりも、物の怪をもっと具体的に、私たちの身体内部を脅かす疫病や悪心、あるいは死者の怨霊ととらえていたようだ。が、やはりそれらは目に見えない存在、それに対抗するのであるから、今で言えば精神的側面と言う他ないだろう。

しかしながら、それら存在は目には見えなくとも、どこにいて、どこを通って、どのようにやって来る、あるいは去って行くのかという点については、当時、具体的に認識されていたようだ。まずはこれら目に見えな

い存在を、実在する場所から探ることによって、サムライの精神的側面の起源に迫ってみよう。

一 土蜘蛛の居所と逃走経路

それにしても、なにゆえに源義家の武具が、白河院の物の怪封じに選ばれたのだろうか。『古事談』が、義家の四代後の頼朝の支配する鎌倉期に成立したからだ、とも言えよう。しかしながらそれだけでは、サムライの精神的側面の起源に迫ることはできない。ここでは、先にも述べたように、物の怪の出現場所や逃走経路に焦点を当てる。つまりこれら説話群の場所表現から、その理由を探ろうというわけだ。

まずは『日本書紀』や『風土記』に登場する、初期の物の怪の一つ、土蜘蛛を見てみよう。これら文献によると、この物の怪は九州を中心に出没していたようだ。その物の怪を退治したのは、多くの場合サムライではなく天皇自身であった。そこには、神武・崇神・景行天皇などの名が上がっている。特に神武東征において、その途上で土蜘蛛が各地で抵抗していることから、その正体は先住民だったのではないかとされている。⁽⁷⁾

まずはその、神武東征の過程を見てみよう。図1は神武天皇が日向から大和に至るまでの、東征ルートを示したものだが、このルート上のいくつかの箇所ですべて土蜘蛛は抵抗している。特に激しい抵抗をみたのが難波の草香で、ここで神武は兄を失っている。やむなく神武は迂回し熊野から吉野を通り、大和盆地に侵入し、今の桜井市近辺で土蜘蛛を退治する。それは土蜘蛛一族を招待し、御馳走を出し、だまし討ちするものであった。

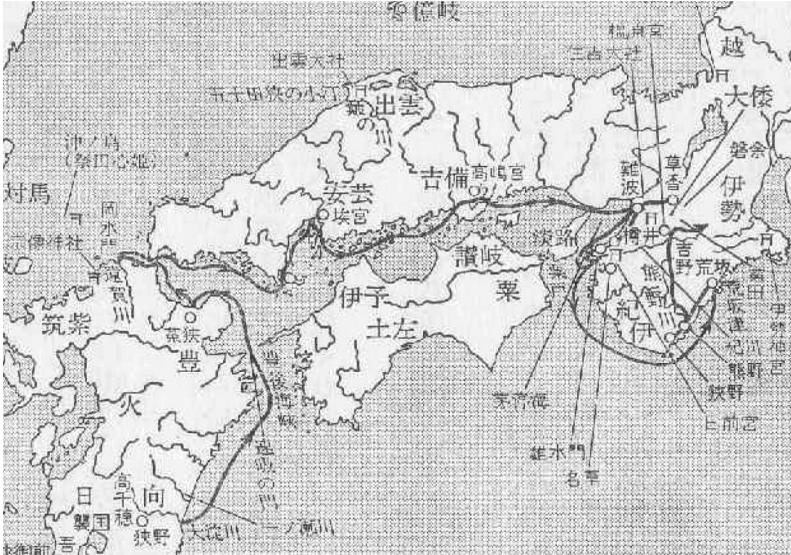


図1 神武東征ルート（井上光貞監訳『日本書紀・上』中央公論社、1987、177頁より）

これら東征ルートと、それぞれの場所で抵抗する土蜘蛛の関係を、神武の侵略と土蜘蛛、つまり先住民の後退と見ることもできる。このように見るのであれば、当初土蜘蛛とは先住民という物理的存在であった。それが退治されたことによって、物の怪としての土蜘蛛へと変換していく。それは、排除された先住民の怨霊、つまり精神的側面への転換なのであった。

さて大和の桜井で退治された土蜘蛛は、その後どこに出没したと伝えられているのだろうか。その場所を追うと、興味深い道筋が浮かび上がってくる。それはそのまま大和王朝の、遷都の道筋なのである。大和と河内の境にある葛城山に、次のような伝承が残っている。

一言主神社の境内に、土蜘蛛塚というのがあ
る。昔、神武天皇が、カツラで網を作って土蜘蛛

蛛を取り、これを頭と胴と脚との三部分に切断し、別々に今の神社の境内に埋め、その上に巨石をすえておかれた。そのあとである。なお、この時、土蜘蛛を取るのに、カツラの網を用いられたから、この地方がカツラキといわれるようになったとい⁽³⁾う。

このようにここでも、土蜘蛛は神武天皇に討ち取られている。神武東征が、日向から大和の桜井までの、住民支配の過程を伝えているのだとしたら、この伝承は、その後大和の権力が河内に向かったことを示している。実際、大和側から葛城山を越えた地域に、巨大古墳群が存在している。また都も大和の飛鳥宮から摂津の難波宮へと、六四五年に移されているのも、この葛城山を越えて河内そして摂津へと出るルートを支持している。都はその後、主に大和の藤原京・平城京から山城国の長岡京・平安京へと北上していく。それは王権の北上を意味している。そしてその途上で、追いやられたであろう土蜘蛛は、やはり平安京にも登場する。『平家物語』の「剣巻」に、次のような話がある。

また頼光、そのころ瘡病わづらはる。なかばさめたるをりふしに、空より変化のものくだり、頼光を網にて巻かんとす。枕なる膝丸抜きあはせ、「切る」と思はれしかば、血こぼれて、北野の塚穴のうちへぞつなぎける。掘りてみれば、蜘蛛にてあり。鉄の串にさしておさされける。それより膝丸を「蜘蛛切」とぞ申しける。⁽⁴⁾

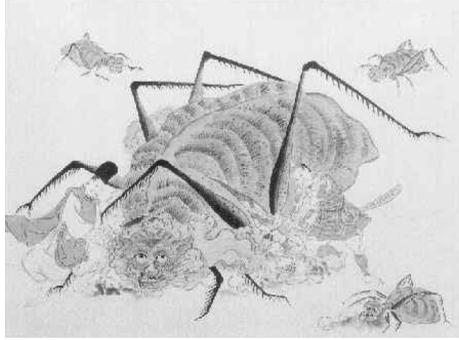


図2 『土蜘蛛草紙絵巻』に描かれた土蜘蛛
(小松茂美編『土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江
山絵詞』中央公論社、1993、10頁)

謡曲の「土蜘蛛」では、頼光たちが土蜘蛛の棲むこの北野の塚穴を崩しはじめたとき、土蜘蛛はその姿を現し、次のように言ったとする。

汝知らずやわれ昔。葛城山に年を経し。土蜘蛛の精魂なり。
なほ君が代に障りをなさんと。頼光に近づき奉れば。却って命を。断たんとや。⁽⁵⁾

つまり先に葛城山で討たれた土蜘蛛が、精魂となり平安京に出没したことになる。その姿は、人ではなく物の怪であった。図2は、次に紹介する『土蜘蛛草紙絵巻』に描かれた、その姿である。そして天皇家に崇ろうと、頼光に近づいたのであった。なぜ天皇自身ではなく、頼光であったのだろうか。室町前期に成立した諸家系図を表した『尊卑分脈』によると、頼光は「大内守護」⁽⁶⁾、つまり平安京における天皇の守護者であった。したがって土蜘蛛は、まず頼光に襲いかかる必要があったのだろう。

もう一つは、鎌倉時代後期、一四世紀前半の絵巻『土蜘蛛草紙』にある。要約すると次のようになる。

源頼光が郎党の渡辺綱と蓮台野を歩いていると、髑髏が空を飛んでいるのを目撃する。あとを追うと、

神楽岡の廢屋に入つていった。するとその廢屋に様々な物の怪が現れる。が二人は動じない。明け方美女が現れ、鞠ほどの白雲のごときものを頼光に投げつけてきた。頼光はとっさに刀で切りつけると、白い血が流れ出た。その血の跡を辿っていくと、西の山を分け入ったところの洞穴に至った。山蜘蛛がいたので退治すると、傷口から沢山の死人の首が出てきた。さらに無数の小蜘蛛も出てきたので穴を掘って埋葬した。この武勇譚が帝に聞こえ、頼光は摂津守に、綱は丹波守に叙せられた。⁽⁷⁾

このように平安京に出没した土蜘蛛は、天皇ではなくサムライ初期の一人、源頼光によって退治されているのだ。サムライの世を開いたとされる、頼朝の四代前の義家(先に『古事談』で登場)は、さらに二代遡れば頼信に至る。この頼信は河内源氏の祖とされるが、その兄に頼光がおり、父は共に源満仲である。この満仲は鎌倉期はもとより、足利、徳川と江戸時代に至るまで武門源氏の祖と仰がれた。その満仲の長男が、この源頼光なのである。

さて、その土蜘蛛の出没場所である。『平家物語』では、まず頼光宅に出没し、流れる血を辿っていくと、北野の塚穴まで続いていたとある。そこが土蜘蛛の棲家だったのだ。頼光宅は『栄華物語』『小右記』『御堂閨白記』など当時の日記類から、一条にあったことが知られている。⁽⁸⁾江戸時代に復原された平安時代の地図『中古京師内外地図』(図3)には、一条戻橋の南東に「山里庵 源頼光家 後道綱亭」とある。

次に、北野の塚穴とはどこを指すのだろうか。江戸時代の名所案内『拾遺都名所図会』に、「蜘蛛塚」の記載がある。その場所は、「七本松通一条の北西側の畑の中の塚のことで、昔ここに大きな土蜘蛛が住んでいた」⁽⁹⁾



図3 「中古京師内外地図」(国際日本文化研究センター所蔵)に見る源頼光宅

とある。もう一つは「頼光塚」と呼ばれ、同じく『拾遺都名所図会』に「船岡山の南西⁽¹⁰⁾」とある。この「船岡山の南西」の「頼光塚」とは、『新撰京都名所図会』によると、「明治初年までは塔頭宝泉院背後(鞍馬口通千本西入紫野郷之町⁽¹¹⁾)」にあったが、昭和七年頃に現在の上品蓮台寺に移動したとある。いずれにしてもこれら場所は、平安京の北西部に位置している。

『土蜘蛛草紙絵巻』はどうであろう。この絵巻に出てくる場所は、蓮台野・神楽岡・西の山の洞穴である。蓮台野・西の山は『平家物語』と同じく平安京の北西部であるが、神楽岡のみ東部に位置している。これも逃走経路という視点から見るのであれば、長岡京から平安京への遷都は、北東方向への侵攻であるから、土蜘蛛が追いやられる場所としては、平安京の東の神楽岡で納得がいくだろう。ところが興味深いのは、その後の方向転換である。どうも土蜘蛛たちは一旦、東へ逃走したのだが、その後北西へと転じていることが、これら場所から読み取れるのだ。この北西方向への転換とは、何

を意味しているのだろう。

二 古代における丹波国と摂津国多田

武門源氏の祖とされる満仲が拠点としたのが、現在の兵庫県川西市の多田であった。当時の呼称で言えば摂津国多田ということになる。満仲の長男の頼光が、この多田を引き継いだことから、頼光は摂津源氏の祖とされる。先に述べたように頼光が河内源氏の祖で、頼光のもう一人の弟、頼親は大和源氏の祖となる。このように満仲の息子たちは、摂津・河内・大和とそれぞれの活動拠点を持っていたことになる。

さて、これら摂津・河内・大和とは、古代においてどのような位置を意味していたのだろうか。古代日本において、天皇の座す地域を畿内と称した。すなわち畿内とは、天皇の住む地域、王城の地を意味する。史料上の初見は、『日本書紀』六四六年の改新詔の第二条で、その範囲を「東は名壑の横河、南は紀伊の兄山、西は赤石の櫛淵、北は近江の狭々波の合坂山⁽¹²⁾」としている。つまり国ではなく、四つの地点でその範囲を示しているのである。この四つの地点を「畿内の四至」と呼ぶ。その後、六九二年持統六年四月に初めて「四畿内」という国単位の表示になる。⁽¹³⁾ その四つの国が、大和・山城・河内・摂津であったのだ。さらに七一六年に和泉国が加わり「五畿内」となる。それらを示したのが図4である。

このような場所に活動拠点を持つことに、どのような意味があったのだろうか。それは平安京で何かあった場合、真っ先に兵力を送り込むことが出来るということ。さらに、平安京では不可能な、郎党たちへの軍事教練

(13)



①名譽の横河 ②紀伊の兄山 ③赤石の櫛淵 ④近江の狭々波の逢坂山 ▲多田

図4 畿内制の変遷図

を、常にほどこすことの出来る場所を確保しているということなのだ。満仲の子どもたちは、王権の中心地である山城国を除く畿内の各国に、それを取り囲むような形で活動拠点を形成し、守護していたことになる。地理的に見ても、まさに王権守護の家であったことが分かる。

さて、山城国の北西方向のことである。先に述べたように、王権の侵攻は大和から河内・摂津から山城へ北上する。そのルート上に、土蜘蛛の逃走経路が浮かび上がってくる。そしてその経路は、山城国において

一度東へとった経路を北西へと方向転換する。図4で、その平安京のある山城国の北西方向を見てみよう。そこに位置するのは丹波国である。丹波国は畿内ではないので、畿外ということになる。つまり王城の領土の外側に位置するのである。ところが畿内制の出発点である「畿内の四至」において、山城国と丹波国の国境は無視されていた。おそらく大和国に王権が所在していた頃、この地点はそれほど重要性を持ち得なかったのだろう。ところが王権は北上する。それにもなつて神武以来の宿敵、土蜘蛛も北上する。その国境としての重要性も北上することになる。王権が平安京に達したとき、畿外の中でも山城国に隣接する丹波国の重要性が、格段に増したであろうことは想像に難くない。

さて武家源氏の祖である満仲、そしてその長男である頼光が拠点とした摂津国多田とはどこにあったのか。

その位置は、ほぼ摂津国と丹波国の境界地帯であった(図4の▲)。つまり多田は、畿内のなかでも、北西の国境地帯を準備する位置にあったのだ。その点が河内や大和との拠点とは違っていた。しかも彼らは多田から平安京に出仕するのに、丹波国を通ったと言われる。平安京の北西は多田源氏の守備範囲だったのである。

このように山城・丹波国境地帯は、王権の北上にともなつて相対的に重要度を増していったと考えられる。王権の守護を任じる武門源氏が摂津多田に位置したことが、物の怪退治の第一人者になつた要因とは考えられないだろうか。

その後、土蜘蛛はどこに逃げたのだろうか。その痕跡が、次の伝承から見えてくる。

綾部市の井倉の〇家は代々美人の筋であったが、これに目をつけた高津の蜘蛛が毎夜々々、美男の武士に化けて通つた。そのうちにみごもつた娘は、ある夜、男の足に針をさした。男が帰つた後、そのしたたる血痕をつけて行つたら、位田の高城という山の峰で蜘蛛が死んでいた。まもなく女は多くの蜘蛛の子を生んだ。その美女の墓は今、井倉のコージン藪にある。⁽¹⁴⁾

平安京から山陰道を北西方向にとり、丹波国の北端、丹後国に接する位置まで辿ると、この現在の綾部市がある。土蜘蛛は、どうもここまで逃げたのである。やはり地理的に見て、彼らは多田源氏によつて追いやられたのであろう。伝承世界ではその後、富山県の黒部にまで到達している。⁽¹⁵⁾ところが彼らは、単に追いやられた

だけではなかったようだ。疫病として畿内を、そして平安京を襲ったようだ。それは次のような記録から、読み取ることが出来る。

二 平安京における道饗祭の場所

古代日本において物の怪は、殊に疫病をもたらすと考えられていた。しかも彼らは、人間の作った道を伝ってやって来ると認識されていた。そのため古代国家は、道饗祭を行っていた。道饗祭とは、道路上で鬼を封じる祭の一つである。『令義解』によると、古代国家はこの祭を、畿内に通じる主要道で行っていた。⁽¹⁶⁾『続日本紀』に次のような記事が残っている。

宝龜元年(七七〇)

六月二十三日 疫病を防ぐ神を京の四隅と、畿内と畿外の堺十箇所⁽¹⁷⁾で祭った。

平安時代になると山城国に都が移るので、山城国の四つの堺でもこの祭が行われた。図5は、その祭が行われたとされる堺を示した図である。山陽・南海道は山崎堺で、山陰道は大江堺(現在の老ノ坂)で、北陸・東山・東海道は会坂堺(現在の逢坂山)、そしてもう一つは大原道・竜花道で、この道が近江国へぬけ若狭に向かう和邇堺(現在の途中峠)でも、この祭が行われていた。これら場所には、今も疫神である素戔嗚尊や牛頭天王、



図5 山城国四堺（足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社、1994、28頁より）

岐神や衢神をまつる神社や地蔵などがあり、その痕跡と考えられている。ここでも北西方向に抜ける大江堺は特別であった。なぜなら酒吞童子の首塚が存在するからである。あたかも武力を、ことさら誇示する境界標識が、山城国境にあるのはここだけである。なぜだろう。それはおそらく丹波国との国境に位置する摂津多田に、源氏発祥の拠点があったからだ。そしてこの物の怪を退治したのも、源頼光であった。酒吞童子の話をかいつまんで紹介しておこう。

正暦（九九〇〜九九五年）の頃、京の都の姫君らが数多さらわれる事件が起こる。安倍晴明が占うと、丹波国大江山に鬼の国があり、その鬼たちの仕業だと判明する。そこで朝廷は、源頼光らに鬼退治の勅命を下す。命をうけた頼光、そして配下の渡辺綱、坂田公時ら四天王は、それぞれ石清水八幡宮、日吉社、

住吉社を詣で鬼退治の祈願をする。大江山に向かった一行は、山中でこれら詣でた神々の化身の案内を受け、大江山の鬼の国に到着する。鬼の国の首領は酒吞童子であった。頼光ら一行は山伏の姿をしていたので、旅の山伏と見誤った酒吞童子は、彼らを鬼の宮殿に招き入れ、酒宴を催す。いずれ山伏たちを食おうとする鬼たちも加わり、田楽や仮装行列を披露する。神々の援助を得て、さらわれていた都の人たちを助け出した頼

光たちは、刀を抜き酔い崩れた鬼たちを切り殺す。酒吞童子も首を落とされるが、その首は飛び頼光に食いつこうとする。が、四天王たちがその目をくりぬき、ついに息絶える。頼光と四天王たちは、酒吞童子の首を土産に、意気揚々と都に凱旋するのであった。⁽¹⁸⁾

この酒吞童子の首を平安京に持って帰ろうとしたところ、大江堺で動かなくなったという伝承もある。それは疫病を、王城の地に入れまいとする意図があったようである。それで現在も、かつて国境であった老ノ坂に首塚が祭られている。

ここではどうか物の怪が山城国に入ることを阻止した。つまり追いやったはずの物の怪が、再度平安京に迫ってくるものと考えられていたのである。実は古代国家は、畿内や山城国の入り口だけでなく、平安京の入り口、あるいは政治の中心地や天皇の居所の入り口でも、この祭を行っていた。

平安京には、山陽道・南海道・山陰道・東海道・東山道・北陸道と、全国から道が通じている。それらすべての道が、羅城門に集結する。そしてそこから大内裏へ行くには、朱雀大路を通って朱雀門へ、さらに内裏に行くには建礼門(図6参照)へと。したがってこれら場所で物の怪を封じる祭りが行われていた。

一見、物の怪を封じると言うのと、まるで退治しているかのように見えるが、実はそうではなかった。先の『令義解』によると「饗遏」、つまり物の怪を招待して御馳走などを用意し接待し、領土への侵入を止め、機嫌良く帰ってもらっていたようだ。であるなら、これら祭りの行われた場所は、物の怪が出没する場所ということになる。それが証拠に、羅城門や朱雀門、あるいは建礼門周辺には、数多くの物の怪が登場した。⁽¹⁹⁾ 様々

な記録にそのことが記されているのである。

しかしながらその祭りは、サムライが行うものではなかった。おそらく最初は神道が行ったであろう。それが徐々に陰陽道に移行されていったようだ。そしてサムライの登場とともに彼らも、この祭りに従事するようになる。

四 一条戻橋と陰陽師そして多田源氏

もう一つ平安京の堺に、物の怪が出没する場所がある。一条戻橋である。この橋には様々な伝承が積みまわった。であるなら、おそらくここも祭りが行われた場所だったということになる。特に安倍晴明にまつわる話が多いことから、陰陽道が関わっていたのだろう。次のような話が『源平盛衰記』第十卷「中宮御産事」に残っている。

治承二年十一月十二日寅時ヨリ、中宮御産ノ氣御座ト罵ケリ。去月廿七日ヨリ時々其御氣御座ケレ共、取立タル御事ハナカリツルニ、今ハ隙ナク取頼ラセ給ヘドモ御産ナラズ。二位殿心苦ク思テ、一条堀川戻橋ニテ、橋ヨリ東の爪ニ車ヲ立サセ給テ、橋占ヲゾ問給フ。十四五許ノ禿ナル童部ノ十二人、西ヨリ東ヘ向テ走ケルガ、手ヲ叩同音ニ「榻ハ何榻国王榻、八重ノ潮路ノ波ノ寄榻」ト、四五返ウタヒテ橋ヲ渡、東ヲ差テ飛ガ如シテ失ニケリ。⁽²⁰⁾

中宮とは平清盛の娘のこと、二位殿とは清盛の妻で中宮の母のことである。つまり清盛の娘が難産だったので、母親が一条戻橋で橋占いを行ったのであった。すると十四、五才の童髪の子どもが十二人、西から走ってきて手を叩きながら妙な唄を歌って消え去った。帰って平時忠に告げると、下の句の「八重の云々」は分からないが、上の句の「榻は何榻国王榻」は、王子が産まれるという目出たい占いだと判断する。そして占い通り、後の安徳天皇が誕生したのであった。しかし下の句は、八才で壇ノ浦に沈むという予言だったので。その後『源平盛衰記』は次のように続ける。

一条戻橋ト云ハ、昔安倍晴明ガ天文ノ溯源ヲ極テ、十二神将ヲ仕ニケルガ、其妻職神ノ兒ニ畏ケレバ、彼十二神ヲ橋ノ下ニ呪シ置テ、用事ノ時ハ召仕ケリ。是ニテ吉凶ノ橋占ヲ尋問バ、必職神人ノ口ニ移リテ善悪ヲ示スト申ス。サレバ十二人ノ童部トハ、十二神将ノ化現ナルベシ。⁽²¹⁾

つまり唄を歌った十二人の子どもは、安倍晴明が隠しておいた十二神将だったので。これはおそらく、ある種の祭られた場所だったのでだろう。

さて一条戻橋とは、どのような場所なのだろう。図6は平安京における一条戻橋の位置を示したものである。これによると内裏の東北、つまり良の方角にあることが分かる。この方位は陰陽道においては鬼門にあたり、しがたってここを祭る必要があった。さらにはここには東堀川が流れ込む。古代日本において、穢れは水に流すものと考えられていた。つまり物の怪は水流を伝って流れていく。ということは流れてくることにもなる。で

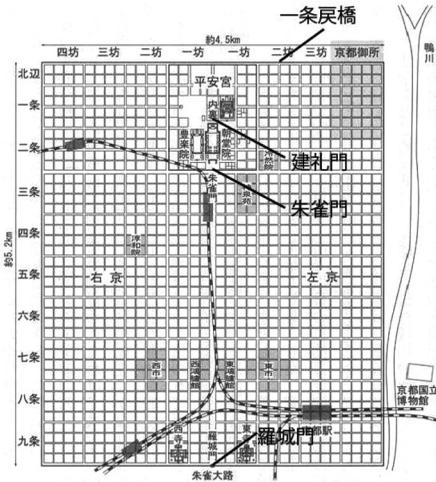


図6 平安京における祓いの場所
 (川尻秋生『平安京遷都』岩波書店、2011、29頁に筆者加筆)

あるなら、この川の水源地から物の怪が流れてくる可能性もあるわけだ。水源地には鬼の国があったとされる貴船や、天狗の国鞍馬がある。なおさらここで止めなければならぬだろう。その役割を安倍晴明を代表とする陰陽師たちが担っていたのだろう。

ところが、その役割をサムライたちも演じるようになる。先に図3の『中古京師内外地図』で源頼光の家を見たが、その場所は一条戻橋のすぐ東南であった。そしてさらにそのすぐ東南に、安倍晴明の家が見えている。これは極めて示唆的な位置であると言わねばなるまい。そして次のような伝承が残っている。それは源頼光の家来、渡辺綱の話である。

源頼光の郎等に「渡辺の源四郎綱」といふ者あり。武蔵の国箕田といふ所にて生まれければ、「箕田の源四」と申しけり。頼光の使ひとして一条大宮につかはしけるが、夜陰におよび馬に乗り、「おそろしき世の中なれば」とて、髭切を帯かせらる。一条堀川の戻橋にて、歳二十あまりの女房の、まことにきよげなるが、紅梅の薄衣の袖ごめに法華経持ち、懸帯して、まぼりかけ、ただ一人行きけるが、綱がうち過ぐるを見て、「夜ふけ、

おそろしきに、送り給ひなや」となつかしげに言ひければ、綱、馬より飛んでおり、「子細にやおよび候ふべき」とて、いだいて馬に乗せ、わが身お後輪にむすと乗り、堀川の東を南へ行きけるに、女房申す様、「わが住む所は都のほか。おくり給はんや」。「さん候」とこたへければ、「わが行く所は愛宕山ぞ」とて、綱が髻を掴んで、乾をさして飛んで行く。綱はちともさわがず、髭切を抜きあわせ、「鬼の手切る」と思へば、北野の社の回廊の上にぞ落ちにける。髻につきたる手を取ってみれば、女房の姿にては雪の膚とおぼえしが、色が黒く、毛があまりて小縮みなり。⁽²²⁾

この話も『平家物語』の「剣の巻」にある。綱はその後、この手を安倍清明に占ってもらい、七日間の物忌みをするようになる。がしかし伯母に化けた鬼が、この手を取り戻しに来るのだった。ここで興味深いのは一条戻橋から乾、つまり北西方向へ鬼が飛翔する点である。確かに愛宕山は都の北西にある。

おそらくこの説話は、一条戻橋を基点に、良(北東)の方角を陰陽師が、乾(北西)の方角を多田源氏が守護していたことを示しているのではないか。山城国境を北東方向に抜けた三井寺で、安倍晴明が泰山府君の祭りを行⁽²³⁾ったことは、よく知られている。三井寺は先の図5で言うと、山城国の東の国境、逢坂山を越えたところにある。つまりこの祭りは、疫病をもたらず物の怪を、饗遇する道饗祭だったのである。そして北西方向には、頼光をはじめとする多田源氏の、活躍を示す痕跡が数多く残されているのだ。

一〇世紀に、これら物の怪を封じる境界祭祀が、神道から陰陽道へと担当替えになったとされるが、その後、サムライもその役割を担っていたことになる。そしてその祭祀場所も、羅城門・朱雀門・建礼門といった

平安京・大内裏・内裏のそれぞれの南門だったのが、北へと移行していったのである(図6)。そして北東が陰陽師、北西が多田源氏の管轄だったのだ。これら説話で語られる場所が、これらのことを示唆している。

五 丹波国の妖怪伝承と撰津国多田

このように山城国の北西方向にある丹波国には、著名な物の怪、つまり妖怪たちが勢揃いしている。土蜘蛛、酒吞童子、そして愛宕山の太郎坊天狗たちは、日本の妖怪の代表と言ってもいいだろう。

口頭伝承の世界においても丹波国は、数多くの妖怪伝承を有している。多田源氏に関連する伝承で言えば、頼光以後、最も著名な多田源氏で、頼光から四代後の源頼政にまつわるものが、いくつか残っている。例えば亀岡市矢田町には、源頼政の鶴退治にまつわる地名伝承がある。源頼政は勅命によって鶴を矢で射たその功績の代償として、この地を賜ったので、矢代、矢田という言葉⁽²⁴⁾になったと言う。そして矢田神社に隣接する頼政塚は、頼政が以仁王とともに、平清盛に対して起こした反乱で戦に敗れ、平等院で自刃した遺骸が埋められているとする伝承。またこの塚は、頼政が退治した鶴を埋めた鶴塚だ、とする伝承もある⁽²⁵⁾。亀岡市横町・古世町などにも、鶴と頼政にまつわる伝承が散見される。

亀岡市本梅町には、頼光が酒吞童子を退治しに行く途中で休憩した場所があり、持っていた鉄棒で岩を打ったため、その岩に今でも大きな穴があいている、との伝承もある。またこの岩は、義経が家を建てるに際し、弁慶が持ってきたものだとする話も伝えられている⁽²⁶⁾。義経は一ノ谷を攻める前に、多田の近く三草山にいたと⁽²⁷⁾

され、おそらくそのことに関わる伝承なのであろう。

古代の丹波国と摂津国の国境付近に残る妖怪の伝承は、畿内と畿外の境界祭祀の痕跡ではなかったか。例えば次の伝承は、この国境における多田源氏と妖怪のせめぎ合いを思わせる。

畑野村と大阪府の村境の大阪府に寄った処、人家を去る一里の山中に、俗に化け石と云う石がある。昔一隊の騎馬の武士がここを通りかかったところ、にわかに一匹の大猫が現れて武士に飛びついた。先頭に立っていた隊将は剣を抜いて、真二つに切り付けて通り過ぎてしまった。程経て村民がここを通って、二つに割れた岩の切り口に血痕のついているのを発見し、武士の切った大猫はこの岩が化けて出たのだと分かったそうだ。今でも二つに裂けて血痕のついた石がある。⁽²⁸⁾

この化け石と呼ばれる石のある、摂津と丹波の国境の峰近く、亀岡市畑野町に西山神社が鎮座する。本神社の祭神は素戔鳴尊と牛頭天皇である。山城国の国境祭祀でも述べたように、これら神々は妖怪の畿内侵入阻止を目的に疫神として祭られている。また次の伝承も猫の妖怪で、やはり畿内と畿外の境に祭られている。

西別院村字神地の府道の傍、五、六間程下に一つの墓がある。この墓には長く髪を垂らした女に化けた、俗に髪結び猫と云うのが出ると云い伝えられている。去年の春も墓の松の木の二股の所に、現れたのを見たと云う人もあった。その時は墓の上に一つの火の玉が見えたと思ったら、すぐその下に十七、八の若い

女が、しきりと長い髪を垂らして髪を結っている。例の化け猫であったのだそう⁽²⁹⁾だ。

この髪結び猫と呼ばれる妖怪も丹波と摂津、つまり畿外と畿内の境界に出没する。そしてその近くには、白髪神社と一杵島姫神社が鎮座している。白髪神社の祭神は天児屋根命である。『日本書紀』によると天児屋根命は、素戔鳴尊を底根国(根国底之国)に追放する際、祓えの祝詞を唱えたとされる⁽³⁰⁾。『延喜式』の「神祇令」によると、平安時代、都に蔓延した疫病や罪は、中臣が祝詞を唱えながら、根国底之国へと川から海を通して流し、そしてそれを素戔鳴尊が受け取り解消する、と考えられていたよう⁽³¹⁾だ。であるならこの地に祀られる神として、まさに相応しいと言えよう。そして同時に、この地で国境祭祀が行われていたことも示唆されよう。また一杵島姫も、素戔鳴尊が根国底之国に追放される際に関わる神であった。

またこの場所のほど近く、丹波側に算盤小僧という妖怪が出没すると伝えられている⁽³²⁾が、その場所も素戔鳴神社であった。これら妖怪たちは土蜘蛛や鬼の姿とはならないが、その出没する場所は、まさに平安京とそれを守護する多田源氏、そして畿外である丹波国と畿内である摂津国という文脈において、理解されるべきであろう。

丹波側だけでなく、丹波に隣接する摂津国にも多田源氏に関わる妖怪の伝承がある。それはまさに源満仲が多田開発に際し、大蛇を退治したとの伝承である。また『住吉大社神代記』には、多田の猪名川に土蜘蛛が住んでいたのを、神が退治したとの伝承⁽³³⁾もある。両伝承とも住吉神社と関連しているのも興味深い。そういえば酒吞童子の退治に際して、頼光の家来たちが住吉神社に詣でている。

その他にも、丹波、摂津の境には、鬼や天狗の伝承もある。『延喜式』の「陰陽寮」に「穢悪伎疫鬼能所所村々爾蔵里隱布留乎波。千里之外。四方之堺。東方陸奥。西方遠值嘉。南方土佐。北方佐渡與里乎知能所乎。奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氏。五色寶物。海産能種種味物乎給氏³⁴」とあるように、所々村々に隠れている疫鬼、つまり妖怪を、山海の珍味で接待して、千里の外にある根国底之国へ饗遇しようと言うわけだが、それが畿内と畿外の境界であったとしたら、摂津国や山城国に接する丹波国の村々に、妖怪が隠れていると認識されていたことになる。そのことが畿内に接する丹波国に、数多くの妖怪伝承を配置させた要因の一つとなる。そして多田に源満仲が拠点を置く必要があった理由も。

『源満仲・頼光』の著者、元木泰雄は次のように指摘している。「秀郷流や桓武平氏が、東国に、あるいは伊勢に有した武門としての基盤を、満仲は多田に得たと言える。多田はその意味で、武門源氏の基盤であり、息子頼光やその系統、また独自の所領を形成するまでの頼親や頼信たちの軍事行動を支えることになったのである。言い換えれば、多田は武門源氏を武門たらしめた所領となった。単に摂津源氏の基盤というだけではなく、武門源氏全体にとって象徴的な意味を有した。それゆえに、文治元年（一一八五）六月、平氏を滅ぼして源平争乱に勝利を収めた頼朝は、この地を強引に収奪しなければならなかった。そして先述のように、満仲が武門源氏の祖と称された原因も、まさにこの多田の所領を開発したためだったのである。」³⁵

また摂津源氏の頼光と、義家、頼朝につながる河内源氏の祖頼信が、ともに登場する説話が多いことから「宗教的・呪術的な王権の守護者と見なされた頼光と、物理的な暴力で東国の兵乱を鎮めた頼信という対比³⁶」があった、とも指摘している。このように多田に拠点を置いた摂津源氏は、特にサムライの精神的側面をも担

っていたのであった。その理由は、王権の守護として、平安京の北西方向を担当していたからではなかったか。

おわりに

満仲が多田に拠点を選定した眼力は、極めて鋭かったと言わざるを得ない。その選定要因の一つに、平安京を襲う物の怪たち、という世界観があったのだ。それは極めて具体的で、先の『延喜式』で引用したように、疫鬼としての物の怪たちは、東は陸奥、西は遠値嘉(五島列島)、南は土佐、北は佐渡の向こうにある根国底之国から、各街道を伝って畿内に接近し、平安京の羅城門、朱雀門、建礼門、そして後に一条戻橋から侵入してくると考えられていた。

多田に拠点を置いた頼光たちは、そのことによって一条戻橋の近くに居を構え、そこから北西方向を守護する役割を得たのであった。そして武門源氏の祖となり、物理的防衛だけでなく、精神的・魔術的防衛をも担当することになる。つまりここにサムライの精神的側面の起源があったのだ。その背景に、このような物の怪の住む国や出没する場所を、具体的に設定することの出来た古代日本人の世界観が、広く横たわっていたのである。本稿の最初に、サムライの精神的側面の起源を、説話に見る場所表現から解読しようと試みた理由は、ここにあったといていいだろう。

そしてサムライたちは、戦国、江戸時代に入っても、物の怪たちと対決していた。寛政十一(一七九九)年の正月、現・石川県加賀市にあった大聖寺藩の八代目藩主の前田利考が、宿衛の武士たちを集めて百物語をさせ

た次のような記録が残っている。

渡邊故々六左衛門、時疫にてなやみけるが、熱も強く打臥し居けり。然るに或日ふと起上り、枕元にありける脇指をおつとり、するりと抜き、勝手へ人を追かける躰にて走り出で、臺所口にのれんかけてありける其のれんに切付け、其儘行倒れたり。家内之者ども周章で騒ぎ、其儘寢所へ連行き介抱して、いかなる事にやかやうの事をいたせしとたづねければ、答へんとするに言舌わからず。然れども病氣は次第に快くなりけり。扱言舌もわかりければいふやう、扱先日³⁷は怪しき事ありたり。熱氣に侵され、夢うつつともわかず、疫病の神をまさまき見し故、其儘脇指を抜き追かけ切付けしに、がしりと手ごたへせしと覚えし跡は知らず打倒れたりと語りけり。家内之者あやしみ、彼の脇指を抜きて見るに、刀にすこしふれあり。是必ず彼の疫病の神を切りし故ならんと、皆人奇異のおもひをなせり。則ち其脇指山本浅之進家に傳へ、今に持ち侍り。今に其の刀のふれはありと語りし也。³⁷

このようにサムライは、江戸時代になっても、疫神つまり物の怪と戦っていたのであった。しかもそれは、サムライだけの特別な行為だったようだ。なぜならこの記録には、物の怪の出現に対して、町人や医者、僧侶、場合によっては下級武士たちさえも、恐れおののく様子が記されているからだ。³⁸そして藩主は言う。サムライとは何物にも動じてはならないのだと。

百物語とは、月の暗い夜を選んで、暗くなり始めた頃から、人々が一部屋に集まり、百の火を灯し、一人一

人が怪談を語るたびに、火を消していく。そのような複数の人たちが語り合う怪談会のことだ。そうすると話が進むに従って、座はだんだんと薄暗くなり、恐ろしいな雰囲気となっていく。丑三つ時(午前三時～三時三十分)、あるいは百話語って部屋が真っ暗になったとき、妖怪が出現すると信じられていた。実は戦国時代以来、百物語は武士の精神鍛錬のために行われた真面目な習俗、つまりサムライ文化だったので。それが江戸時代になると庶民の間でも流行する。このときすでに、まさにサムライでない者たちの、サムライ精神の受容が始まっていたのだった。

実在しないサムライというレトリックと、これまた実在しない妖怪とは、このように表裏一体の関係にあった。その両者を媒介したのが、ここで上げた場所群だったのかも知れない。

付記・本研究には、平成23～26年度科学研究費補助金(基盤研究c)「都市空間における神話的特性の変容過程に関する歴史地理学的研究(課題番号23520969)」(研究代表者・佐々木高弘)を使用した。最後に、平成二五年三月二二日をもって退任される吉村亨先生に、本拙稿を献呈させていただきます。

注

- (1) 『古事談・続古事談』(新日本古典文学大系41)岩波書店、二〇〇五、四三三頁。
- (2) 大林太良・吉田敦彦監修 『日本神話事典』大和書房、一九九七、二二一～二二二頁。
- (3) 渡辺昭五編 『日本伝説大系(九)』みずうみ書房、一九八四、三二頁。
- (4) 『平家物語(下)』(新潮日本古典集成第四七回)新潮社、一九八一、二七九頁。
- (5) 『謡曲大鑑(三)』明治書院、一九三一、二〇五～二〇六頁。
- (6) 『尊卑分脈』(新訂増補国史大系)吉川弘文館、一九六一、一〇七頁。

- (7) 小松茂美編『土蜘蛛草紙・天狗草紙・大江山絵詞』(続日本の絵巻26)中央公論社、一九九三、二〇一―二一頁。
- (8) 隴谷寿『源頼光』吉川弘文館、一九六八、一八〇―三七頁。
- (9) 秋里籬島『拾遺都名所図会』(新修京都叢書七)臨川書店、一九六七、四四―四五頁。
- (10) 同上、三七―三八頁。
- (11) 竹村俊則『新撰京都名所図会(三)』白川書院、一九六一、三八頁。
- (12) 『日本書紀(上)』中央公論社、一九八七、二〇八頁。
- (13) 同上、三八―三七頁。
- (14) 磯貝勇『丹波の話』東書房、一九五六、九八―九九頁。
- (15) 石黒漢子『富山の伝説』桂書房、一九九三、五四―五八頁。
- (16) 『令義解』(新訂増補国史大系)吉川弘文館、一九八三、七七頁。
- (17) 『続日本紀(下)』講談社、一九九五、三八頁。
- (18) 前掲注7、七六―一〇三頁。
- (19) 佐々木高弘著・小松和彦監修『京都妖怪案内』大和書房、二〇二二。
- (20) 『源平盛衰記(二)』三弥井書店、一九九三、一一―二頁。
- (21) 同上、一一―一二頁。
- (22) 前掲注4、二七六―二七七頁。
- (23) 『今昔物語集 本朝部(中)』岩波書店、二〇〇一、一〇四―一〇七頁。『不動利益縁起絵巻』(新修日本絵巻物全集 第三〇巻)角川書店、一九八〇。
- (24) 田中勝雄『地名起源伝説と動植物伝説―続南桑民譚雑録―』『旅と伝説』第十卷九号、三三社、一九三六、七〇頁。
- (25) 『口丹波口碑集』(日本民俗誌大系 第四卷 近畿)角川書店、一九七五、三〇―三三頁。
- (26) 福田晃編『日本伝説大系(八)』みずうみ書房、一九八八、二八九頁。

- (27) 川西市史編集専門委員会編『かわにし 川西市史第一巻』兵庫県川西市、一九七四、三六五～三六七頁。
- (28) 前掲注25、二九七頁。
- (29) 前掲注25、三一一頁。
- (30) 前掲注12、一一五～一一六頁。
- (31) 『交替式・弘仁式・延喜式(上篇)』(新訂増補国史大系)吉川弘文館、一九七二、一七〇頁。
前掲注24、七五～七六頁。
- (32) 『住吉大社神代記』(日本庶民生活史料集成第二十六巻 神社縁起)三一書房、一九八三、一六頁。
- (33) 『延喜式(中篇)』(新訂増補国史大系)吉川弘文館、一九七二、四四三頁。
- (34) 元木泰雄『源満仲・頼光―殺生放逸 朝家の守護』ミネルヴァ書房、二〇〇四、七四頁。
- (35) 同上、一四九頁。
- (36) 『聖城怪談録』(『大聖寺藩史談』石川県図書館協会)一九七一、六八頁。
- (37) 佐々木高弘「城下町と妖怪」『かが風土記』加賀市、二〇一三、二七～八六頁(印刷中)。
- (38)